

# 備陽史探訪

第43号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

## 「いつまでも活性に あふれた会に」

会長 神谷 和孝

桜花開花の便りが各地から寄せられる良き時候となつて参りましたが、会員の皆様 お元気でお過しのことと御慶び申し上げます。

さて、この会報が今年度初の会報になります。皆様にお送りしました総会報告の冒頭にも記しましたように備陽史探訪の会も発足して九年が経ち、今年目を迎えようとしています。

十年ひと昔と言われていますが、備陽史探訪の会が発足した当時のことを考えると、本当に十年の歳月はふりかえてみると短かい感じはしても、本会の発足の経過、行事の一つ一つ、この九年間の会員の顔ぶれ等々を細かに考えると、矢張り「十年ひと昔」と言う言葉の持つ意味を実感として感じます。

会員の顔ぶれ、特に会の中核となつて、会の発展に大きな貢献をしていただいた方の顔を思い出しても、この九年間で大きく様変わりしていることを感じます。幸いなことに物故された方は居ませんが、身体の自由が利かなくなつたから、孫がふえて守に追われるからとか老齢になつたことを理由に会を退かれた方も多く、また、独身だつたかたが家庭を

持ち、時間がなくなつたからとか、仕事上、責任ある地位についたので時間がなくなつたからとか、会を辞めていかれた方々一人一人を思いおこすにつけ、歳月の流れを感じさせられます。

然し、色々のあがきをしながらもこの会も十年を迎えようとしているのです。十年の歩みは貴重だと思えます。会の発展を願つて努力していただいた方々の努力の結晶です。

十年目を迎えるにあつて、この結晶を更に大きくしていくことが、これからの大きな課題になると思いま

す。ここまで大きく発展したものは我々の責任で更に大きく育てていかねばなりません。

「十年前の例会に参加するのは本当に楽しかった」と古い会員が言われます。その当時の例会に比較すると数段と今の例会の方が内容のあるものになつてきているけれど、発会当時の参加する喜びがなかつたんだらうと考えさせられる。

今、私が一番おそれるのは十年の歳月の中で、失敗がなく(余り大きな)、まわりからの評価も受けながら、知らず知らずにマンネリの状況に落ちこんでいくことです。マンネリの会の運営にならないためにも、一人でも多くの方の斬新なアイデアや意見の提供と、直接に会の運営にたずさわっていただく方を望んでいます。

会の活性化を会員一人一人が自分の課題として考えてみて下さい。

### 今年もよろしく お願いします

- |      |           |
|------|-----------|
| 神谷和孝 | 会長        |
| 田口義之 | 副会長       |
| 種本 実 | 事務局長      |
| 山口哲晶 | 同 歴史民俗部会長 |
| 武島種一 | 古墳研究会会長   |
| 中西 晃 | 参与        |
| 佐藤洋一 | 同         |
| 末森清司 | 同         |
| 棗田英夫 | 同         |
| 七森義人 | 同         |
| 井上良三 | 同         |
| 後藤匡史 | 同         |
| 小林良子 | 同         |
| 佐藤錦士 | 同         |
| 高橋安子 | 同         |
| 藤代由子 | 同         |
| 堀エミ子 | 同         |
| 佐藤秀子 | 同         |
| 目崎昌弘 | (新役員)     |
| 金永真澄 | ( )       |

## 中世を読む会講演会

テーマ

草戸千軒町のあった場所

講師

広大教授 青野春水先生

時 四月二十三日(日)

午後一時三〇分〜三時

場所 福山中央公民館

会費 無料

主催 城郭研究部会

速報!!

正福寺裏山二号古墳の  
墳丘測量が完了

古墳研究部会

正福寺裏山一号古墳に次いで、本年一、二月に二号古墳の形を調べる測量を行いましたので報告します。

正福寺裏山一・二号古墳は福山市加茂町大字下加茂に所在し、『福山市史 古代中世編』に「正福寺山前方後円墳」として、二基の古墳が記述されているものに当たります。なお、広島県立府中高等学校生徒会地歴部『古代吉備品治国の古墳について』では「合の坪前方後円墳」として報告されています。

加茂町は芦田川が形成した神辺平野の北縁にあります。地形は芦田川の支流である加茂川が中央を北から南に流れ、川を挟んで両側に低丘陵が延びています。この低丘陵には多数の古墳が分布しており、加茂町は広島県東南部における古墳密集地帯の中心的な位置を占めています。正福寺裏山一・二号古墳もこの一角にあり、加茂川の西側丘陵から東に派生した尾根上を利用して築かれてい

ます。どちらの古墳からも眺望は極めて良好です。

一号古墳は一九八四年に墳丘測量を行ない、『山城志』第八集に紹介されています。この中で、現地形からは前方後円墳と見ることは難しく、円墳（直径十五〜十八メートル・高さ二メートル前後）の可能性が高いことを明らかにしました。

さて、二号古墳は一号古墳より十八メートル低い、標高約七十メートルにあり、水田との比高は約三メートルです。墳丘測量の成果は第二図に示すとおりで、古墳の形は、前方部の西側が崩れていますが、前方後方墳であることが明らかにになりました。古墳の大きさは、全長が二十九メートル、後方が長き十七メートル・幅十三メートル・高さ三メートル、前方部が長き十二メートル・幅七メートル・高さ一・五メートルを測ります。葺石と埴輪片が散布していることと記録されていますが、現状では明らかにできませんでした。また、後方をボーリングステッキにより確認したところでは石材はなく、木棺直葬あるいは粘土椀に埋葬されていたものと思われま

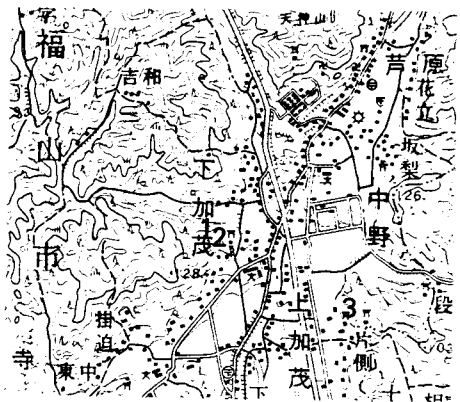
す。現在、広島県内で確認されている前方後方墳は、湯釜古墳（広島市）・上矢口古墳（広島市）・善法寺九号古墳（三次市）・千ガ寺一号古墳（庄原市）で、前方後方墳の可能性を有するものとしては宇那木山二号古墳（広島市）・蔵王原古墳（福山市）があります。しかし、前方後方墳の数は全ての古墳数、また前方後円墳の数と比較しても極めて少ないものです。この傾向は全国的に見ても同様です。

前方後方墳は古墳時代の始め頃、吉備の中心部（岡山県）で主要な古墳に見られ、しだいに各地へ広がっていったことが指摘されています。ただ、全容の明らかになつた前方後方墳は数少なく、まだまだ検討すべき点を多く残しています。

正福寺裏山二号古墳は、広島県東南部の中心的な位置にあり、全長二十九メートルほどの古墳ではありませんが、前方後方墳という特異な墳形を呈しており、当地域の古墳時代の有様を考える上で極めて重要な位置を占めることが明らかになりました。

古墳の中軸線の延長線上、南東方向に当たる加茂川東側の尾根上には中国製の斜縁二神二獣鏡などが副葬されていた石鍬山一号古墳があり、これと何らかの関係があったことも推考されます。

第一図 古墳位置図

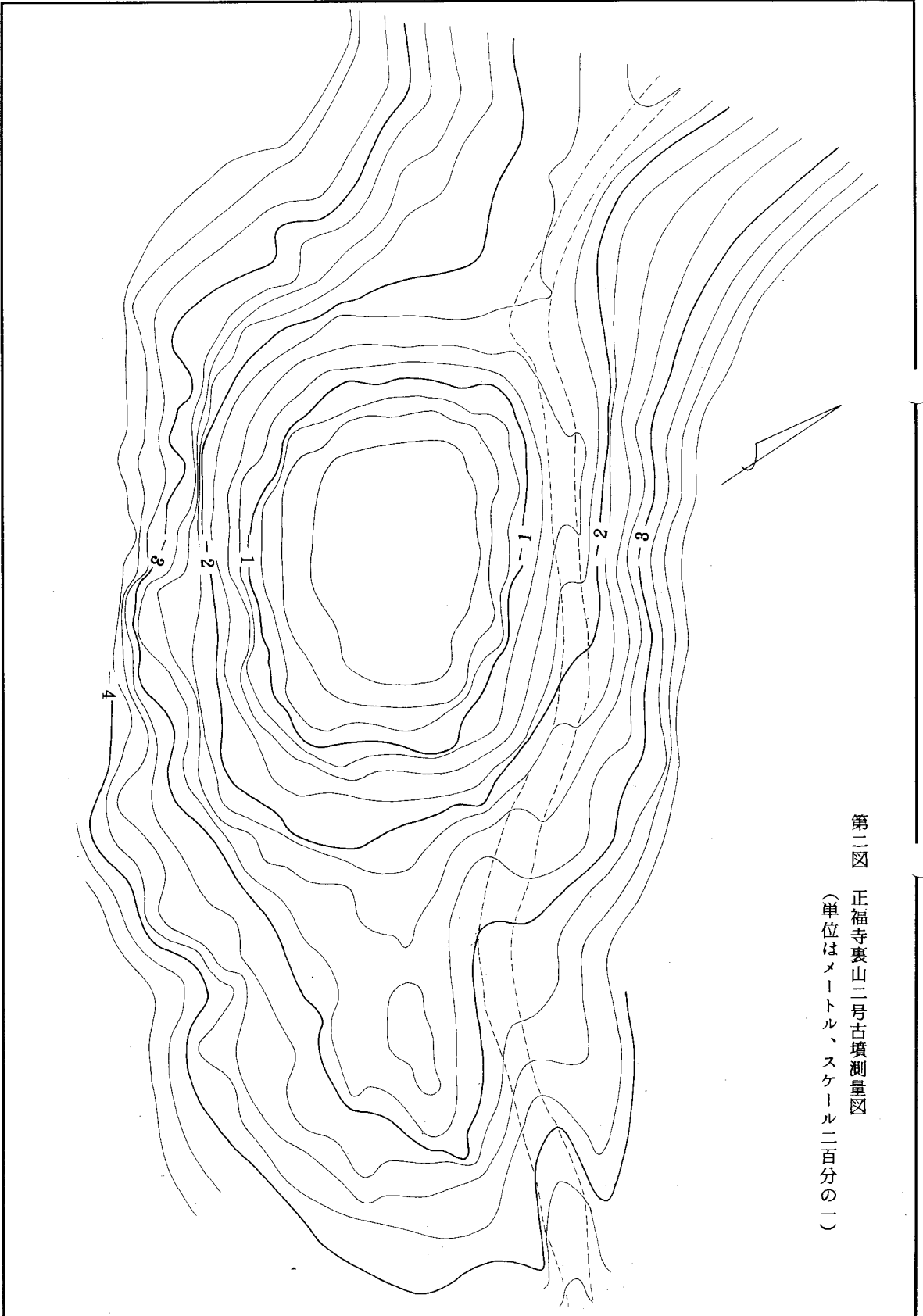


1. 正福寺裏山一号古墳
2. 正福寺裏山二号古墳
3. 石鍬山一号古墳

古墳の測量では、福山葦陽高校郷土史研究部員・府中高校地歴部員・本会員など多くの方々の協力を得ました。記して感謝の意を表します。

今後とも古墳時代の遺跡分布図や墳丘測量図などの基本的な資料を作成し、検討を加え、歴史の実相に迫って行きたいと考えています。皆様のいっそうの御支援をお願いします。

(文責 篠原芳秀)



第二図 正福寺裏山二号古墳測量図  
(単位はメートル、スケール二百分の一)

## 天領人

上下町 熊谷 操子

よそもん。旅のもん。疎開者。始めて聞いたこんな言葉を、背にいつぱいいつぱい浴びながら、予想して

いた苦しい生活を始めたのは戦争の末期であった。大阪豊中の待避壕で拾った三つの命の移動である。天領という土地柄が生んだ言葉だったのだ、と理解出来るまで随分時間がかかったようだ。ちよつと賑やかで、ちよつと静かで、自然を沢山残している標高四〇〇メートルのこの地が、今では私にとって第二の故郷、まるで上下のぬしのような顔して、町を潤歩している。

「子供の頃、何を買った時だったか覚えていないが、差し出された柄の長い飯杓子の姉みたいな物に金を払い、それで釣銭をもらった記憶がある」と、六十余年の昔の話を土着の友人から聞いた。そんな横柄な態度でよく商売が出来たもんだと私は不思議に思った。大阪商人の腰の低さを随分見てきたから。

同じ頃、近在の学校の生徒も寄せ、上下の小学校で大運動会めいたものが催された。足の速いのが田舎

の子で、上下の子供は大抵走り負けたとか。その時口惜しさの余り、天領を笠に着た子供達は、「なんじゃい、在五郎兵衛のくせしやーがつて」と、ののしれば在の子は、シュンというなだれたという。

自由主義文学の田山花袋が、明治四十年に『蒲団』を発表した。代表的作品である。そのモデル岡田美知代の生家は今も本通りにあり、別荘と公園は中学校の近くにあり、奇麗に残っている。当時は大理石をくり抜いた風呂があったというから、父胖十郎の金融王としての勢力は相当なものだったと想像する。娘の恋愛を洗いざらい書かれた胖十郎は烈火の如く怒り、花袋に抗議文を突きつけ、詫び状をとり、ひきづるようにして娘を連れ帰ったそうである。大名に支配されない天領の地としてのプライドと、潤達な気風が金融王や豪商を生んだのだろう。これらが現在の本通りに軒を連ねていたというから凄い。

大正九年、上下町と矢野村（現上下町）の有志七人が、福塩線敷設陳情のため上京した。高木音吉。吉田兼吉。川上浩民。田辺辰三。（血縁だろうと思われる田辺政一郎秀克の名を、三月例会御調八幡で見つけた。

一番上の玉垣に、石段の敷石三段寄付とあった）三玉精之助。原田英五郎。山岡儀平（同じ玉垣の三四段めに本人の名で三十円寄付とあった）

当時の内務大臣井上角五郎は福山出身で、この人が在職中には非福塩線を通そうと嘆願したのだが、大臣に「日本には汽車を通したい所は何百とある。上下のような山の中へ汽車をつけるなんて無用の事である。はるばる赤ケツトをかついで（都会見物の田舎者の意）東京へ出て来るとは世間知らずにも程がある。サッサと国へ帰れッ」と罵倒された。ところが天領生まれの天領育ちは豪放である。まして頭を下げるのが大きらいという七人だから仕末が悪い。

「黙れ角五郎。もうお前には頼まん。ハワイへ汽車をつけると言うたんじやああるまいし、今の技術なら富士山へでも汽車はつけられるじやろうが。山陰山陽の連絡に何故福塩線が不必要なのか。若しロシヤが日露戦争の報復に山陰へ上陸したらどうして兵を送るんじや。そんな事ぐらい分からん大臣なら、この次の選挙には必ず落としてやるからそう思え」と勢のおもむくまま、とんだ悪態をつけてしまった。そこで仕方がないので望月圭介（後の通信大臣で

確か大崎島出身だったと記憶する）を訪ねて陳情した。「私も同感、必要な鉄道だと思うから協力しよう」と、大変協力的であったとか。そしてその紹介状を持ち、東京に泊り込んで毎日陳情運動を続けた。そのうち色々な事があった一時運動を休んで帰郷した事もあったものの、その後もあくことなく運動を続け、実に十八年間（全線通じるまで）この費用全部自費でまかなったというから恐れ入る。現在のリクルート感覚からは、ちよつと想像も出来ない話である。昭和五年のある夕方「ハナシ

ツイタ」上京して運動を続けていた川上浩民から電報が届いた。しかしその頃、七人の侍の中で残っていたのは、あと田辺辰三だけだった。東京から帰った川上浩民と田辺辰三とが、声もなく手を取り合ったまゝ、涙の対面、その劇的シーンが見えるようである。そして昭和十年吉舎一上下が開通し、上下駅に汽笛が勢よく鳴り響いたのは、運動を始めて実に十六年め。それから三年後にやっと府中まで延びた。福塩線が出来上れば山陰と連絡しなければ意味がない。三江線。木次線も実は七人が運動した副産物である。木次線の開通式には、川上、田辺両氏は案内を受

け、華々しく出席したそうである。その後には三江線開通。しかし惜しむらくは七人とも既に幽界の人だった。これら勇しい天領人の汗を想い、心意気を偲びながら、私は月に四、五回福塩線の客となる。

付記 上下には昔から、これという産物はないようです。私自身は、ひょうたん最中（安福寺のひょうたん和尚の名をもじった菓子）と、田総羊かんをよく人様へのお土産に使います。

### 夢うつつ

佐藤 秀子

古井戸と祠は、わたしの夢では、お馴染みのセットである。大富山城の頂上付近にあった落葉に埋もれた大きい井戸をみた時、往時の様子がまざまざと目の中に浮かび、タイムスリップして確かめたい気がした。昔日、石で囲まれていた井戸は伝令の使者が水を呑み、少しロマンチックに考えれば、炊事をしている下女と軽輩の若者が水吸みの時、恋を語ったところかもしれない。今、井戸の中にはどんな想いが眠っているのだろうか。

わたしの田舎である丸亀の城にも深く大きい井戸があり、その中に石を投げこんでは水面に落ちる迄の時間をはかり、説明文に書かれている井戸の深さを調べてみたりした。そして善通寺の自衛隊にいた友人が、丸亀城の石垣でレインジャー訓練をする事を聞き、雨の日なら観光客が少ないねと、冒険好きのわたし達はその友人に井戸の中へ降りてもらおう事にしたのである。手討ちになった人達の白骨が累々と重なっているかもしれない、いやそれよりも城から通じるぬけ道があるかも…と時代小説を読みすぎのわたしは、胸おどらせてロープ等を用意した。結果は途中までしか降りられず、壮挙(?)

は成りたなかつた。今考えると無謀で、事故が起きなくてよかつたと思っているが。田舎へ帰って城へ登ると必ず井戸をのぞきこんでみると遠くなった青春を預けてあるようにとてもなつかしい。

祠と言えば、田舎の神社の裏に五つほどあり子供の頃の遊び場所であったので今も忘れることはない。毎日、男の子達と手裏剣ごっこやビー玉遊びに明け暮れていたわたしにとって社の縁の下や屋根裏は、隠れ場所であり昼間、息をひそめて、そこ

へ潜んでいる時、ひとり取り残された様でこわい思いをしたことを覚えている。けれど恐れを知らないわたしは祖母の諫めも聞かず、祠の扉を開けてみて中の御神体が丸い石や平たい板きれ一枚であることを見てしまい、以後二三日は、さすがに祟りがないかとビクビクしながら日を過ごしたものだ。

古いものには時を生きてきた強さと、すでに神様になった(人間と同じく八十を過ぎると、すべて神になる…つまり動かしがたい何物にも変えられない存在になる…)というのがわたしの考えです)やさしさがあつた例会等でみせて頂く掛軸や古文書、仏像には口では言い表せないものがある。又、先日のお調八幡宮での秀吉手植えの桜の切株も、あの囲りで供の者達が居並んでその植える様子を見守っていたと思うと、付近の土を踏みしめるのにも胸中に溢れるものをおさえることはできないし、末近三郎の遺骸を葬ったあの丘の粗末な屋根の下にも、無念の思いを残して死んでいった彼の幽魂が、身じろぎもせず座っているような気がして合わせた手にこころをこめた。

生来、押し入れが好きで姿が見えない時は襖をあけると眠りこけたわ

たしがコロンところがりだという幼時の話そのまま、今になっても、暗い所ではんやり考えるのが好きな性格は変わらない。講師の説明を聞きながらも空想の世界にひたつてしまい、あまり真面目な聴き手ではないのである。けれど、雑事に追われて現実の事以外考えることのなくなった昨今、他のことを考えさせてくれる…という例会は、とても楽しい。

人間が一生のうちで夢をみる時間は通算すると四年半になるといわれている。うたた寝したりぼんやりしている事の多いわたしの場合は多分その倍に近いだろう。けれど夢は好き。これからも会の皆様とすてきな夢をみたいと思っています。

### 新入会員紹介 三月二十九日入会

CONFIDENTIAL  
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

## 歴史を学ぶ

小島 袈裟春

六年程前、福山市教育委員会等の主催で、有名な明日香村高松塚の発掘を担当された、網干善教先生の講演会が催された事がありました。

私も得難い機会と聴講させて頂きました、当時はその塚の被葬者について議論が盛んであったので、先生がそれに触れるかどうか、興味深々でしたが、さすがに直接は触れず高貴の方、とのみで星辰、日月、の面にその証処を示したに止まりました。又、先生は字の正しい書き方や四神名の書き順も教え、青竜、白虎、ではなく、青竜、朱雀、白虎、玄武、と東西南北の順でなければ点をやらない、と明言されました。

私は後に仏教関係の本を読んだ時、本尊を守る四天王の順が、持国、增長と、東南西北の順である事を知って、歴史の基本を学ぶとはこう云う事か、と云い知れぬ感動を受けた思い出もあります。

さて私がこの講議で一番興味深かったのは……歴史を学ぶ……いわゆる歴史学は、お金、になるのか、と云う事でした。先生はこの件につ

いて、お菓子屋に行つて……八百屋だったかな？……「青竜白虎じゃないよ、青竜、朱雀、の順だよ」と云つたと大福餅の価を半額にしては呉れない……と皆を笑わせながら歴史を職業とする事の難かしさをさりげなく示されたのでした。

それから六年福山市にも博物館の完成目前、又いろは丸の探索に市から、一部補助金を出す等自治体も歴史に目を向け始めてはいるものもまだまだ歴史を厄介もの道楽者扱いの考えは抜けない様にも思えます。

歴史を学ぶとは単に大化改新は六四六年と暗記する事ではなく、何時の代に、どの様な事が、どの様な状況、背景の中で、どの様に行われ、どの様な結果を生じたか、を探り取り分析して、現代への参考資料とする事だと思ふ。そして我々が今、史跡を探索するのも、この歴史の証処を現実にこの眼で、足で、心で確めるものだとも思ふ。まあ平たく云えば先人の事蹟に学び、過ちの部分には繰返さない心構えを養う事だと思ふのです……。

さて前述の様な世間の風調の中で探訪会の役員や若い方々が真剣に尽力されて居られる事に私は心からの敬意と強い期待を寄せて居ります。

近事、一部政治家、役人、商売人達の歴史洞察力を欠いた言動は誠に気になるところですが、一方で歴史に学ぶ気運が拡大して行けば次第には広い意味での確たる歴史観を持った人達が社会の指導層を構成する様になると……何となく探訪会に加入して居る事が日本の将来を担って居る様に思えて来ました。

## 御調八幡宮と久井町の史跡巡り

後藤 匡史

此の度の例会にあたって、今から七年前、昭和五十七年（一九八二年）が、豊臣秀吉（まだこの頃は羽柴秀吉）の備中高松城水攻め（天正十年一五八二年）四〇〇年祭がゆかりの各地で行なわれた。

そこで、何んとかこれを取り上げて見ようと数年前から、会員の末森氏と話し合い、又、御調八幡宮については、五年前の昭和五十八年七月、新人物往来社歴史研究会二十五周年全国大会が京都にて行なわれた。

其の時、京都御所、近衛邸、九条邸、紫式部ゆかりの露山寺、仁和寺、下御霊神社、そして和気清磨、姉広虫を祭る護国神社等、今年平成元年三

月十九日、何んと、これが八幡日和とでも言おうか快晴のバスの中。

姉広虫は、第四十九代光仁天皇をして、広虫が人の悪いことを言うのを聞いたことがないとその慈愛の心は日本女性の鑑であると言った所、佐藤秀子さんが山内一豊の妻、千代とどちらと言うので、まあ高貴なお方だけに広虫の方がと言ったが!! 山と和気（分け）で山分けで同じ、まあ良かった。

又、弟を想う気持ちは強く、私の子供も姉弟二人ですが、これを姉弟（教材）にして仲良くやってくれたら良いと思う。何んちゃって。

一寸話はそれだが、神社では巫女さんが由来について熱心に話され、願ってもない宝物殿を開けていただき、社宝の国重文板木、奈良興福寺の板木に次ぐ日本で二番目に古く、板木の修復としては第一号である。他に足利義政寄進の狛犬、銅剣、巻物等。サスが八幡社は神仏混合、宝物がいっぱいである。

そして久井の資料館では奥村館長さんが福山から大挙してやって来たので感激して一席お礼にぶった。これも一つの地域の活性化。

今年もヨイショウの後藤で行きます。

## 備中高松城跡へ どうぞ

末森 清司

本年度第一回例会御調八幡宮と久井町史跡めぐりには多数のご参加有がとうございました。参加された皆様方のご感想いかがでしたか。何しろ勉強不足でつたない説明誠に申しわけなく思っております。

久井町には、私もまだ見学していない史跡文化財が数多く有ります。残念な事に道がせまいため大型バスの通行が出来ず多数の皆様と一所に見学出来ないのが残念です。

次回はマイクロバスにて神笠城跡、高根山城跡を中心として、それに関連する文化財を見学したいと計画を今から立てております。その節にはぜひ参加下さい。

久井町羽倉城主末近信賀公が切腹された備中高松城跡(岡山市高松町)において今年も六月第一日曜日に清水宗治公、月清入道公、末近信賀公他家来衆の供養祭が行われます。

この日は城跡にある資料館において高松城の戦いの資料が一般公開され(一年に一回この日のみ)地元の郷土史家が親切に説明して

下さいます。会員の皆様ぜひ一度行って下さい。私も都合がついたら行ってみたいと思っております。

高松城跡の堀に植えているハスは四〇〇年前のハスです。堀を復元し水を入れたら自然に植えてきたとの事。四〇〇年前のハスの根が生きており堀復元と共に活き返ったのでしよう。永い眠りからさめて今に私達の目を楽しませてくれます。高松城跡へ行かれましたら一見しその昔を充分偲んでみて下さい。

### 三月例会に参加して

穴井 正

昨日来よりの天気予報では雨になるのではと案じていたが、朝起きて見ると、東の空は晴れ、好天気になりそうである。八時福山駅の集合場所に行ってみると、すでに何人かの人が来ている。あちこちより三々五々と集り定刻八時三十分前になると全員が集り顔見知りの人やはじめの人が今日の史跡探訪に胸をおどらせ、バスへ乗込みバスは定刻八時三十分出発、やがて福山の町を出て横尾を過ぎ府中街道へ入る。先づ田口副会長の挨拶があり、本日の講師

末森氏より例の熱弁にてユーモアたっぷり本日行程の説明が有り、続いて後藤氏がこれから行く御調八幡宮の資料にもとづいて説明を聞きながらバスは快調に府中を通り御調町へと入ると両面の山蔭に広がる田園風景は春の陽光を一杯受け今にもあらゆる生物が頭を持ち上げようである。説明を聞くうち、いつしか御調八幡宮へと到着。バスを降り川のはとりを歩く事五分、右手に神社の石段が見え、やがて到着、早速後藤氏の説明が有り石段の両側には、しだれ桜がしばみふくらませている。寄進者の石燈籠を見ながら登り着き先づ柏手を打ち健康と安全を祈念し神殿に上ると古い建物で絵天井あり。和気清磨呂の姉広虫が子供を連れ清磨呂との三年振りの再会を嬉しそうに愛情たっぷり聖女のようにやさしさをただよわせた絵を見てみると、やがて美しい神官の衣装をまとった柙宜さんが座り宮の由来の説明を受け社宝の蔵を開けて国の重文狛犬、板木を見る事が出来昔の人の素晴らしい彫刻に、「ため息が出る見学が完了昼食を暖かい陽光の良い所を選び気の合った者同志が集り弁当を開き久方振り童心に帰えり、まるで小学生の遠足のように楽しく春の陽

光しを受け刈寄せた枯草の上にねころがり青空を眺め川のせせらぎを聞きながら、しばし昼寝をするうち女の人のかん高い声に目をさますとつくしが芽を出している、と云って取っている人、散策している人。しばし何もかも忘れ去り二〇〇〇年前の光景を思い浮かべているうち十二時になったので又川のほとり。楽しく語らいながらバスに乗込む。久井の中の市の説明を聞きながら行く事三十分位。城主末近四郎三郎の墓の前に立つ清水宗治と共に辞世の歌を残し散って行った部将を偲び漢詩の説明を、末森氏より解説され昔の人は文章が実に上手と感嘆。城跡を見に行くこの城跡も本年でなくなるとの事。バスに乗込み久井稻生神社へと向う道の両側はこのような中国山地の山奥に平坦な田園が有り赤瓦の屋根が春の日に輝き自然に調和した景色である。やがて目の前の山の中腹に、朱塗りの神社が見える。バスを降り参通を登り後藤氏の説明を聞き、久井町資料館へと行き見学をする。一郵便局長さんが千数百点に及ぶ資料を集め私達に大正時代から昭和三十年代使用した事の有る品々を見て思わずなつかしきで一杯であった。人は死して名を残し資料を残し

て呉れた一郵便局長さんに感謝しながら外へ出ると館長さんらしい人が久し振りの団体の見学者で嬉しそうに挨拶が有り、牛の市公園を見て帰路につく。今日はあまりにも好天に恵れ皆んな今日の史跡めぐりに満足をしてパスの中にては居眠りをしてる人も有り小生もしばし眠ってしまった。田口副会長の声に目をさますとパスはすでに福山市内に入っている。末森氏、後藤氏の挨拶が有り今日一日私達を楽しませて下さって大変御苦労様でした。本当に有難う御座居ます。厚くお礼申し上げます。

### 八尾山城踏査日誌

城郭部会 佐藤 錦士

三月廿六日 後藤さんと二人新市方面に向う。一宮にお参りして、武道奉納額を見て往時の武術試合を偲ぶ。

小生中学時代、柔道の試合を見た事があるが、田口さん出身の盛進高校が勝った事があるも額は見当らなかった。

常城はどうかと思つたが山が高く一見見ただけで時間的に無理と分り取りやめ。一路青目寺七ツ池にと向う。

う。

青目寺は、比高二五〇米余の中腹に有り建物が新築モルタル作りでピシと来ない。見所は、石垣と五重の石塔婆(県重文)ぐらいか。石垣は三〇〜五〇cm位の野面積で高さ三米ぐらいか、一寸だけ戦国山城を思ふ。昔は天台宗とか、現在は真言宗。大蛇のミイラか頭ガイ骨とかが有名ですが、ヒョツとしたらサメの頭かも知れず、一度でも見たいものだ。何年か前何十年に一度の開帳とかで新聞紙上に出た様な気がするが……七ツ池は水が実にきれいです。一番上の五番池が大きく美しかった。池は全部で六ツ、それも五ツ目の大池を道で分割して、しかも奥の方に別名を付けて七ツ名にした感がする。何ジャー エーカゲンニセエンカノ七ツ池にはあち等こち等に青目寺堂趾あれど昔を偲ぶ遺構は何一つ残っておらず全く期待ハズレ。

南北朝時代は南朝方に付いた別当弁房さんが活躍したそうですが。ウソ見たい、何にかピンと来ないのは小生一人か……。昔からセンチン虫と寺社と馬鹿は高い所に登るとは良く云つたものだ、当を得ている。

八尾山城趾に向う。山城山頂附近と北側の植林を残しあとは全部丸裸。

小生一人東側の谷間を登る。急コウバイで思つたより楽でない。

東側の最初の曲輪横幅五米、縦一五米余りか。尾根の左は林、右は裸、2-3位登った所で左側に道があり左西側に入る。百米も歩いたか、大正十三年とある妙見神社の鳥居がある。南に面した社に着く、二、三十米上が本丸らしい。右廻りに進むと左(西)に曲輪数段有り、全部で七段。尾根を利用したオオギ型で、西側の曲輪跡には五〇センチ位の土塁が所々に見られる。

上から順番に一号横幅十米縦幅十一米、段差四米を降りると二号横六米縦三米段差四米 三号横七米縦五米段差四米 四号横十米縦十五米段差六米余り 五号横七米縦三米段差三米余り 六号横十一米縦九米段差三米 七号横五米縦二米と小さいが直径三〜二米の丸味をおびた岩石が切落し状に真立して自然の要害となっている。直下前方に出口の谷間が急コウバイにある。

北側から本丸を見ると高さ十二、三米の直立した島状に感じる。土質が滑土で風雪に弱いが良く遺構は残っている方だ。

本丸は北側が広く南側がせまい。南北に六十米余り、東西が広い所で

十八米、不等ダ円型のさつまイモを思わせる。南面に三段の十米余りの曲輪あり。尚、最初の妙見社も二段の曲輪趾の様だ。

北側十米下には長さ三一米幅七米の曲輪、その十米下に空堀深三米余りで振り分けに縦堀が二十米はあるだろうか。尚百米も下った所にも深一米位の空堀と道に利用した縦堀がある。

東側の尾根にも五段以上の曲輪あるも時間切れで次回の楽しみとする。いつも初めて見る山城は何か新発見をした様ないい様なない感激を覚えるのは小生一人だけだろうか。これがあるから仲々やめられないよネエー。

### 山城志原稿募集

- 一、内容は歴史に関する論考、紀行、書評、短歌など。
- 二、四百字原稿用紙一〇枚前後
- 三、写真図版は二枚以内
- 四、締切は八月末日(厳守)
- 五、投稿先 事務局

※都合により次号に見送らせていただく場合もあります。御了承下さい。



備後國府中八尾城之図

城郭研究会佐藤錦士記



# 第七回親と子の古墳めぐり

親と子で古墳を見て触れて、少しでも歴史に関心を持つてもらえればと始めた「親と子の古墳めぐり」も今回で七回を迎えることになりました。ここまで続けられたのも会員の熱い思いと私たちの呼び掛けに賛同し、参加していただいた方々の御協力のおかげだと思います。今回も是非ご参加下さい。

主催 備陽史探訪の会

事務局 〒720 福山市多治米町

5-1918

田口義之方

☎0849(3)6157

後援 福山市教員委員会

## 一、目的

親と子の古墳を中心とした古代文化とのふれあいを通して、子供に歴史に対する関心を抱かせると共に、古墳等の文化財に対する知識とその正しい取り扱い等を学び、併せて郷土に対する認識を広めさせることを目的とする。

## 二、日時

一九八九年五月五日(金)小雨決行

AM 九〇〇 駅前釣人像前集合

PM 三三五 福山駅着解散

\* 当日雨天の場合は五月七日

(日)に順延

## 三、見学場所

福山市加茂町から駅家町にかけての古墳(猪の子古墳、正福寺山二号古墳、掛迫古墳群、土井古墳等)

## 四、参加申込

往復ハガキに参加希望者と各自の年齢、住所、電話番号、参加者同志の關係(小学生の場合は学年も)を明記の上四月二十九日までに上記事務局まで申込みのこと。(但し、先着一〇〇名程度になり次第締め切ることが有ります)

## 五、参加費

親と子で一五〇〇円(大人一〇〇〇円、子供五〇〇円)

\* 交通費、資料代込み

## 六、参加資格

約五kmの行程を歩行可能な方、但し、小学六年生以下の児童については保護者の付添いが必要とします。

## 七、日程

九:〇〇 受付開始:九:三〇 福山

駅前発(バス) ↓ 猪子古墳 ↓ 正福寺

山古墳 ↓ 土井古墳 ↓ 掛迫古墳 ↓ 法成

寺公民館(スライド上映) ↓ 一五・一一 駅家駅発(福塩線) ↓ 一五・三五 福山駅着解散

※都合により変更あり

## 八、その他

\* 各自弁当、飲食等持参して下さい。

\* 服装は山歩きのできるものを着用して下さい。

## 見学地紹介

### 猪子古墳(県史跡)

加茂町下加茂の江木神社境内に残る古墳時代終末期(七世紀後半)の古墳。墳丘は崩壊して元の姿は明らかでないが円墳と推定されている。内部は整美な花コウ岩切石で築かれた横口式石櫛で、長さ六、七メートルを計る。横口式石櫛は中央では天皇皇族クラスの墓室として採用されたもので、備後のような地方に存在するのは極めて特異なもので、多くの謎を秘めている。

### 正福寺山二号古墳

本会報に古墳部会の調査報告が掲載されているので詳細はそれによりたい。前方後円墳とされていたが、本部会の測量によって前方後方墳であることが判明した。一見の価値ある古墳である。

### 掛迫古墳群

駅家町法成寺の掛迫の丘陵に存在する古墳群である。

中でも六号墳は昭和三〇年に府中高校の豊元国氏を中心とする調査団によって発掘され、二基の竪穴式石室から三角縁神獣鏡やダ竜鏡などが出土し、備南地方の古式の古墳として注目されるようになった。墳丘は全長四六メートルの前方後円墳とされているが円墳の可能性も残り、今後の調査が期待されている。備南地方では竪穴式石室を見学できる唯一の古墳である。

☆ 会に対する御意見、御要望は事務局へ。

☆ 会報原稿は常に募集中です。簡単な論考、例会等の感想文、短歌、史跡のレポート等原稿用紙三枚前後でお寄せ下さい。

備陽史探訪の会事務局  
〒720 福山市多治米町五一一九-八

田口義之方

☎〇八四九(五三)六一五七